

# 保健室観・養護教諭観からみた健康相談の在り方に関する研究 —女子大学生と現役養護教諭の比較調査より—

橋口 文香\*<sup>1</sup>・坂田 光恵\*<sup>2</sup>

\*<sup>1</sup>九州女子短期大学子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

\*<sup>2</sup>福津市立福間中学校 福岡県福津市花見が丘2-10-1 (〒811-3214)

(2016年11月10日受付、2016年12月8日受理)

## 要 旨

近年、児童生徒の抱える健康問題は多様化しており、養護教諭は児童生徒一人ひとりの健康問題に応じた対応が求められるようになってきている。養護教諭の活動の拠点である保健室や、保健室で行われる活動のひとつである健康相談は、児童生徒の心と身体の両面の健康を保持増進する役割を担っていると考えられる。そこで、利用する側と経営する側の保健室観・養護教諭観の実態や意識の違い、養護教諭の行う支援が成長過程の児童生徒にどのような教育的効果を与えるのかを知り、養護教諭の専門性や教育活動としての健康相談の対応・支援の在り方を考察することを目的に調査を行った。その結果、女子大学生と現役養護教諭の保健室観・養護教諭観の調査により、保健室や養護教諭の行う活動に教育的効果があることが示唆された。保健室は、児童生徒のニーズに応えながら教育の場として更に機能することが期待される。また、養護教諭は力量形成や学び続ける姿勢を持ち、求められる資質・能力の向上に励むことが重要である。教育者として、また、児童生徒の身近な大人のモデルとして、健康相談に取り組む必要があると考えられる。

## 1. 緒言

近年、児童生徒の抱える健康問題は多様化しており、養護教諭が心身の健康問題のために健康相談等で継続支援した学校の割合は、7割を超えている<sup>1)</sup>。養護教諭は、児童生徒一人ひとりの健康問題に応じた対応が求められるようになってきている。保健室という場所では、養護教諭独自の保健室観・養護教諭観を持ち、養護教諭の専門性が多いに発揮されるよう、保健室経営や健康相談等を実施し、日々児童生徒の養護をつかさどるための活動が行われている。

養護教諭の活動の拠点と考えられる保健室に着目すると、学校保健安全法第7条に「学校には、健康診断、健康相談、保健指導、救急処置その他の保健に関する措置を行うため、保健室を設けるものとする。」とあり、児童生徒の健康を保持増進するために、学校保健活動のセンター的役割<sup>2)</sup>を果たしていると捉えることができる。

また、保健室で行われる活動のひとつである健康相談に着目すると、平成9年保健体育審

議会答申において「養護教諭の職務の特質や保健室の機能を十分に生かし、児童生徒の様々な訴えに対して、常に心的な要因や背景を念頭に置いて、心身の観察、問題の背景の分析、解決のための支援、関係者との連携など、心や体の両面への対応を行う健康相談活動である。」と提言され、時代の変化と共に健康相談の在り方も変化し、児童生徒一人ひとりのニーズに応じた健康相談が求められ重視されている。これらのことから、保健室という場所や保健室で行われる代表的な活動の健康相談が、児童生徒の心と身体の両面の健康を保持増進するための役割を担っていると考えることができる。

今日、養護教諭は、独自の保健室観・養護教諭観をもとに、児童生徒の養護をつかさどるための活動を行っているが、保健室を利用する立場にある児童生徒の保健室観・養護教諭観はどのようなものなのであろうか。経営する側である養護教諭と保健室を利用する立場である児童生徒では、保健室や養護教諭に対する感じ方や考え方に、少なからず意識の違いがみられるのではないだろうか。その違いを発見することで、養護教諭の職務において、より効果的な対応・支援の在り方について考えることができると推測する。

また、保健室や養護教諭は、学校という教育の場に存在するものである。一つの声掛けや、動作、行動まで、養護教諭が児童生徒に対して行う活動は、全て教育活動に値するものであると考えられる。特に健康相談については、先行研究<sup>3)</sup>においても、「養護教諭の行なう健康相談活動は、子どもの自己決定や自身の解決を可能にする支援」と述べられており、心身共に成長過程にある児童生徒にとって、何らかの教育的効果があると考えられる。

そこで本研究では、保健室の利用割合が男子よりも有意に高い女子<sup>4)</sup>に限定し、数年前まで保健室を利用する立場にあった女子大学生と、保健室を経営する側である現役養護教諭の保健室観・養護教諭観の実態や意識の違いを調査し、①養護教諭の行う支援が、成長過程の児童生徒にどのような教育的効果を与えるのか知り、②養護教諭の専門性や教育活動としての健康相談の対応・支援の在り方を考察することにする。

## II. 調査方法

### 1. 調査目的

利用する側と経営する側の保健室観・養護教諭観の実態や意識の違いを調査し、養護教諭の行う支援が、成長過程の児童生徒にどのような教育的効果を与えるのか知り、養護教諭の専門性や教育活動としての健康相談の対応・支援の在り方を考察する。

### 2. 保健室観・養護教諭観について

本研究では、保健室観を「保健室に対する考え方、イメージや印象」、養護教諭観を「養護教諭に対する考え方、イメージや印象」と定義する。

### 3. 調査対象・時期

女子大学生、現役養護教諭共に、調査用質問用紙は、今野<sup>3)</sup>の養護教諭および保健室に関

する研究の質問内容を参考に作成し、使用した。

#### A) 女子大学生

九州地区の女子短期大学1年生の幼稚園教諭養成課程79名、養護教諭養成課程71名、合計150名に、自記式質問用紙を使用し、無記名で調査を行った。調査時期は、平成27年4月に実施した。

#### B) 現役養護教諭

F県の都市部のベッドタウンとして発展し、人口増加の著しいM地区の小学校21校、中学校9校、小中兼任校1校、全31校に勤務する現役養護教諭を対象とし、自記式質問用紙を使用し、無記名で調査を行った。調査時期は、平成27年5月に郵送法を用いて行った。

### 4. 質問内容

#### A) 女子大学生

- |  |
|--|
| (1) 保健室や養護教諭について                         |
| 保健室のイメージ・保健室とはどういった所だと思えるか・養護教諭に求めるものは何か |
| (2) 相談経験について                             |
| 養護教諭へ相談経験の有無・相談内容・特に記憶に残っている相談           |
| (3) 相談した結果について                           |
| 養護教諭の対処・対処後の結果                           |

#### B) 現役養護教諭

- |                                  |
|----------------------------------|
| (1) 養護教諭及び勤務する学校のプロフィール          |
| 校種・年齢・勤続年数・学校規模・平均保健室来室人数        |
| (2) 保健室や養護教諭について                 |
| 職務において重視している活動・養護教諭に求められるものは何か   |
| (3) 現在勤務する学校の児童生徒の健康相談について       |
| 健康相談の有無・その内容                     |
| (4) これまでの児童生徒の健康相談について           |
| 特に記憶に残っている健康相談の内容・対処・対処後の児童生徒の様子 |

### 5. 統計処理

クロス集計における検定については、 $\chi^2$ 検定を用いた。有意差検定の判定については、統計解析ソフトIBM SPSS Statistics Version Ver.21を使用し、有意水準は5%とした。

### 6. 倫理的配慮

本研究で用いた質問紙は、無記名として匿名性を確保し、対象者に対し回答しないことで不利益は生じないこと、本研究以外で使用することはない旨を口頭と文章で説明した。質問紙に回答することで、本研究に同意したとみなした。また、回収した質問用紙は管理に十分留意し、解析を行った。

## III. 結果

※以下、幼稚園教諭養成課程を幼稚園、養護教諭養成課程を養護と記す。幼稚園、養護で認識に違いがあった項目において、有意差検定を行い結果を記す。

※回答割合は、小数点第2位を四捨五入し小数点第1位までを表している。

A) 女子大学生

女子大学生のアンケート回収率は、幼稚園79名中79名(100%)、養護71名中71名(100%)であった。アンケートに記入不備があったものを除外した結果、有効回答率は、幼稚園79名中70名(88.6%)、養護71名中66名(93.0%)、全体では150名中136名(90.7%)であった。

B) 現役養護教諭

現役養護教諭のアンケート回収率ならびに有効回答率は、31名中19名(61.3%)であった(表1)。

1. 養護教諭及び勤務する学校のプロフィールについて

表1. 養護教諭及び勤務する学校のプロフィールについて

	(n=19)	回答数	回答割合(%)
<b>質問1. 校種</b>			
①小学校		9	47.4
②中学校		9	47.4
③小中一貫校		1	5.4
<b>質問2. 年齢</b>			
①20歳代		7	36.8
②30歳代		2	10.5
③40歳代		4	21.1
④50歳代		6	31.6
⑤60歳代		0	0
<b>質問3. 通算勤続年数</b>			
①5年間未満		4	21.1
②5～10年間未満		4	21.1
③10～20年間未満		5	26.2
④20～30年間未満		2	10.5
⑤40年間以上		4	21.1
<b>質問4. 児童生徒数</b>			
①100人以下		3	15.8
②101人～149人		1	5.3
③150人～299人		1	5.3
④300人～499人		5	26.3
⑤500人～699人		5	26.3
⑥700人～899人		3	15.8
⑦900人以上		1	5.3
<b>質問5. 平均保健室来室人数</b>			
①10人未満		5	26.3
②10人以上～20人未満		5	26.3
③20人以上～30人未満		4	21.1
④30人以上～40人未満		3	15.8
⑤40人以上		2	10.5
<b>質問6. 資格</b>			
①養護教諭2種免許		7	36.8
②養護教諭1種免許		12	63.2
③養護教諭専修免許		0	0
④保育士資格		2	10.5
⑤幼稚園教諭免許		0	0
⑥看護師資格		2	10.5
⑦保健師資格		0	0
⑧その他		4	21.1

## 2. 保健室の印象について

### A) 女子大学生

表2. 自由記述について (複数回答)

カテゴリ	回答数	主な記述
救急処置	46	・けがや体調不良のときに行くところ ・学校の病院 ・救護室
リラックス	44	・癒しの場所 ・休めるところ ・安らぎの場所
好意的な印象	18	・安心感 ・あたたかい
場所	14	・人が集まる所 ・静か
健康相談	7	・話しやすい場所 ・何でも話せる場所
健康管理	2	・学校全体の健康を管理している場所
不伏	1	・消毒液のにおいがすごい
その他	4	・必要 ・白い
無回答	3	

保健室を一言で例え、自由記述で回答を求めた。得られた回答をKJ法にて9項目のカテゴリに分けた (表2)。

表3. 保健室の印象について

保健室のイメージ	(n=136)							
	小学校		中学校		高校		全体	
	回答数	回答割合 (%)	回答数	回答割合 (%)	回答数	回答割合 (%)	回答数	回答割合 (%)
①病気やけがをした時に行く所	134	98.5	128	94.1	123	90.4	385	94.4
②身長や体重を測る所	100	73.5	97	71.3	77	56.6	274	67.2
③身体について知ることができる所	63	46.3	69	50.7	67	49.3	199	48.8
④性について知ることができる所	25	18.4	49	36.0	47	34.6	121	29.7
⑤悩みを相談する所	54	39.7	92	67.6	90	66.2	236	57.8
⑥養護教諭に会いに行く所	65	47.8	60	44.1	53	39.0	178	43.6
⑦遊びに行く所	30	22.1	34	25.0	21	15.4	85	20.8
⑧寝に行く所	19	14.0	32	23.5	28	20.6	79	19.4
⑨サボりに行く所	12	8.8	25	18.4	26	19.1	63	15.4
⑩物をもらえる所	78	57.4	84	61.8	74	54.4	236	57.8
⑪なんとなく行く所	23	16.9	28	20.6	24	17.6	75	18.4

保健室の印象について、11項目の設問を小学校・中学校・高校の校種別に、そう思うものに○、そう思わないものに×、どちらでもないものに△をつけるよう回答を求めた。

学生全体が「そう思う」と回答した上位5項目は、「病気やけがをした時に行く所」94.4%、「身長や体重を測る所」67.2%、「悩みを相談する所」「物をもらえる所」57.8%、「身体について知ることができる所」48.8%の順であった。

校種別にみると、小学校では、「病気やけがをした時に行く所」98.5%、「身長や体重を測る所」73.5%、「物をもらえる所」57.4%、「養護教諭に会いに行く所」47.8%、「身体について知ることができる所」46.3%であった。中学校では、「病気やけがをした時に行く所」94.1%、「身長や体重を測る所」71.3%、「悩みを相談する所」67.6%、「物をもらえる所」61.8%、「身体について知ることができる所」50.7%であった。高校では、「病気や怪我をした時に行く所」90.4%、「悩みを相談する所」66.2%、「身長や体重を測る所」56.6%、「物をもらえる所」54.4%、「身体について知ることができる所」49.3%であった (表3)。

幼稚園と養護の課程別にみると、「養護教諭に会いに行くところ」の項目において小学校では、幼稚園35.7%、養護60.6%であり、高校では、幼稚園25.7%、養護53.0%であった。「悩みを相談する所」の項目において小学校では、幼稚園28.6%、養護51.5%、高校では、幼稚

園48.6%、養護84.8%であった。どちらの項目も、養護が有意に多い結果となった(表4)。

表4. 保健室の印象について(課程別比較)

保健室のイメージ	※上段を幼稚園(n=70)、下段を教諭(n=69)、全体(n=136)とする。					
	小学校		中学校		高校	
	回答数	回答割合(%)	回答数	回答割合(%)	回答数	回答割合(%)
①病気やけがをした時に行く所	68	97.1	64	91.4	62	88.5
	66	100	64	97	61	92.3
⑤悩みを相談する所	20	28.6 **	43	61.4	34	48.6 **
	34	51.5	49	74.2	56	84.8
⑥養護教諭に会いに行く所	25	35.7 **	25	35.7 *	18	25.7 **
	40	60.6	35	53.0	35	53.0
⑦遊びに行く所	12	17.1	17	24.3	12	17.1
	18	27.3	17	25.8	9	13.6

\*\*p<0.01 \*p<0.05

## B) 現役養護教諭

現役養護教諭の職務のうち10項目を新版・養護教諭執務のてびき<sup>2)</sup>より引用し設問として使用した。10項目は、小学校・中学校・高校の校種別とし、経験したことのある校種において、1年間を通じて特に重視して活動しているものに◎、重視して活動しているものに○、重視して活動していないものに×、どちらでもないものに△で、回答を求めた。また、校種別の高校に関しては、回答者が1名であるため除外し、小学校と中学校に着目することにする。

表5. 養護教諭の職務について

養護教諭の職務について	(n=19)					
	小学校		中学校		全体	
	回答数	回答割合(%)	回答数	回答割合(%)	回答数	回答割合(%)
①学校保健情報に関する事	4	21.1	2	10.5	6	15.8
②保健指導に関する事	5	26.3	1	5.3	6	15.8
③救急処置及び救急体制に関する事	13	68.4	7	36.8	20	52.6
④健康相談に関する事	6	31.6	7	36.8	13	34.2
⑤健康診断に関する事	3	15.8	3	15.8	6	15.8
⑥学校環境衛生の実施に関する事	0	0	5	26.3	5	13.2
⑦学校保健に関する各種計画及び組織活動の企画、運営への 参画及び一般教員が行う保健活動への協力に関する事	2	10.5	1	5.3	3	7.9
⑧感染症の予防に関する事	6	31.6	1	5.3	7	18.4
⑨保健室の運営に関する事	8	42.1	6	31.6	14	36.8
⑩保健教育の指導案に関する事	0	0	0	0	0	0

現役養護教諭全体が、「特に重視して活動している」と答えた上位3項目は、「救急処置及び救急体制に関する事」52.6%、「保健室の運営に関する事」36.8%、「健康相談に関する事」34.2%の順であった。

校種別にみると、小学校では、「救急処置及び救急体制に関する事」68.4%、「保健室の運営に関する事」42.1%、「健康相談に関する事」「感染症の予防に関する事」が31.6%であった。中学校は、「救急処置及び救急体制に関する事」「健康相談に関する事」が36.8%、「保健室の運営に関する事」31.6%、「学校環境衛生の実施に関する事」26.3%であった(表5)。

## 3. 養護教諭に求める資質・能力について

### A) 女子大学生



養護教諭に求める資質・能力について、回答が最も多かった項目は、「話しやすさ」126名(92.6%)、次いで「やさしさ」125名(91.9%)、「話を聞いてくれる」119名(87.5%)であった(表6)。

#### B) 現役養護教諭

養護教諭に求められる資質・能力について、回答が最も多かった項目は、「迅速な対応ができる」が17名(89.5%)、次いで「話しやすさ」15名(78.9%)、「相談しやすさ」13名(68.4%)であった(表6)。

表6. 養護教諭に求める資質・能力について(複数回答可)

内容	回答数	回答割合(%)	内容	回答数	回答割合(%)
①やさしさ	125	91.9	⑩常識がある	72	52.9
	11	57.9		6	31.6
②話しやすさ	126	92.6	⑪体力がある	21	15.4
	15	78.9		6	31.6
③包容力がある	89	65.4	⑫公平な態度である	110	80.9
	7	36.8		11	57.9
④手当てが上手	113	83.1	⑬話を聞いてくれる	119	87.5
	7	36.8		11	57.9
⑤知識が豊富	101	74.3	⑭とっさの判断ができる	77	56.6
	7	36.8		12	63.2
⑥相談しやすさ	117	86.0	⑮迅速な対応ができる	88	64.7
	13	68.4		17	89.5
⑦頼りがいがある	100	73.5	⑯いつも保健室にいる	69	50.7
	5	26.3		2	10.5
⑧明るさ	105	77.2	⑰何も求めない	4	2.9
	10	52.6		0	0
⑨指導力がある	45	33.1	⑱その他	2	1.5
	8	42.1		3	15.8

※上段を女子大学生(n=136)、下段を現役養護教諭(n=19)とする。

## 4. 養護教諭への健康相談について

### 4-1. 健康相談の有無について

#### A) 女子大学生

女子大学生を対象とする質問紙には、「健康相談」を「相談」と表現し、回答を求めた。養護教諭への相談経験について、学生全体で「はい」63名(46.3%)、「いいえ」73名(53.7%)であった。

表7. 課程別の相談経験について(n=136)

養護教諭への相談経験	幼稚園(n=70)		養護(n=66)	
	回答数	回答割合(%)	回答数	回答割合(%)
①はい	16	22.9	47	71.2 **
②いいえ	54	77.1	19	28.8 **

\*\*p<0.01

課程別に見ると、「はい」と回答した者は、幼稚園が16名(22.9%)、養護が47名(71.2%)であり、養護が有意に多い結果となった(表7)。また、養護教諭へ相談経験のある者に、相談した内容に当てはまるものを複数回答で求めた。最も多かった相談内容は、「友人関係」「進路」28名(44.4%)で、次いで「部活動」21名(33.3%)「健康状態」17名(27.0%)の順であった。

## B) 現役養護教諭

養護教諭の職務における「相談」は、「健康相談」に当てはまることが考えられるため、現役養護教諭を対象とする質問紙には、「健康相談」という表現を使用し、回答を求めた。「児童生徒がよく健康相談にきますか」の設問では、現在の勤務している学校において、1日の保健室利用者数が、保健室利用状況に関する調査報告書<sup>1)</sup>に示された1日の保健室利用者数の平均を超える場合を「よく」と定義付けし回答を求めた。「はい」4名(21.1%)、「いいえ」14名(73.7%)、無回答1名(5.3%)であった。「よく」相談にくると答えた学校で、現役養護教諭が児童生徒より受けた相談内容について、複数回答で、回答を求めた。最も多かった相談内容は「友人関係」3名(75.0%)、次いで「家族」「勉強」「病気」「けが」「病院について」が2名(50%)の順であった。

## 4-2. 養護教諭への健康相談で特に記憶に残っているもの

※全26項目のうち女子大学生、現役養護教諭共に回答がなかった項目は省略する。また、相談内容の番号についてはアンケートで使用した番号で掲載する。

表8. 特に記憶に残っている相談について

相談内容	回答数	回答割合(%)	相談内容	回答数	回答割合(%)
①恋愛	4	6.3	⑩性について	0	0
	0	0		4	21.1
②家族	2	3.2	⑭いじめ	2	3.2
	1	5.3		1	5.3
③友人関係	10	15.9	⑮虐待	0	0
	8	42.1		2	10.5
④勉強	3	4.8	⑰食事	1	1.6
	0	0		0	0
⑤進路	20	31.7	⑲生理について	1	1.6
	0	0		0	0
⑥部活動	10	15.9	⑳その他	2	3.2
	0	0		0	0
⑧けが	2	3.2	無回答	1	1.6
	0	0		2	10.5
⑨健康状態	5	7.9			
	1	5.3			

※上段を女子大学生(n=63)、下段を現役養護教諭(n=19)とする。

## A) 女子大学生

養護教諭へ相談経験のある者の、特に記憶に残っている相談については、「進路」20名(31.7%)が最も多く、次いで「友人関係」「部活動」10名(15.9%)であった(表8)。

最も回答の多かった「進路」の項目において、課程別にみると、養護が17名(36.2%)、幼稚園が3名(18.8%)であった(表9)。



表9. 特に記憶に残っている相談について (課程別)

相談内容	回答数(回答割合%)		相談内容	回答数(回答割合%)	
	幼稚園	養護		幼稚園	養護
①恋愛	2 (12.5)	2 (4.3)	⑨健康状態	0 (0.0)	5 (10.6)
②家族	1 (6.3)	1 (2.1)	⑭いじめ	0 (0.0)	2 (4.3)
③友人関係	5 (31.3)	5 (10.6)	⑮食事	0 (0.0)	1 (2.1)
④勉強	1 (6.3)	2 (4.3)	⑲生理について	0 (0.0)	1 (2.1)
⑤進路	3 (18.8)	17 (36.2)	⑳その他	1 (6.3)	1 (2.1)
⑥部活動	2 (12.5)	8 (17.0)	無回答	1 (6.3)	0 (0.0)
⑧けが	0 (0.0)	2 (4.3)			

※幼稚園(n=16)、養護(n=47)

## B) 現役養護教諭

これまでの児童生徒の相談で、特に記憶に残っている相談は、「友人関係」8名(42.1%)が最も多く、次いで「性について」4名(21.1%)、「虐待」2名(10.5%)であった(表8)。

## 4-3. 健康相談に対して養護教諭が行った対処

## A) 女子大学生

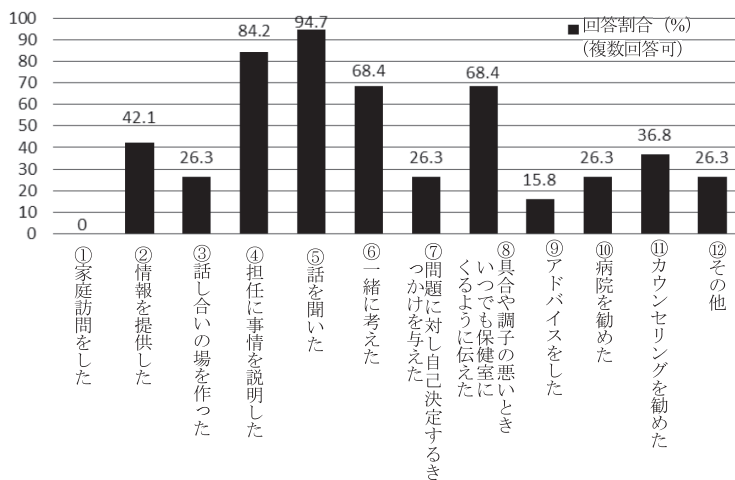


図1. 健康相談に対して養護教諭が行った対処について (n=63)

養護教諭が行った対処について、回答の多かった上位3項目は、「話を聞いてくれた」50名(79.4%)、「一緒に考えてくれた」37名(58.7%)、「アドバイスをしてくれた」33名(52.4%)であった(図1)。

B) 現役養護教諭

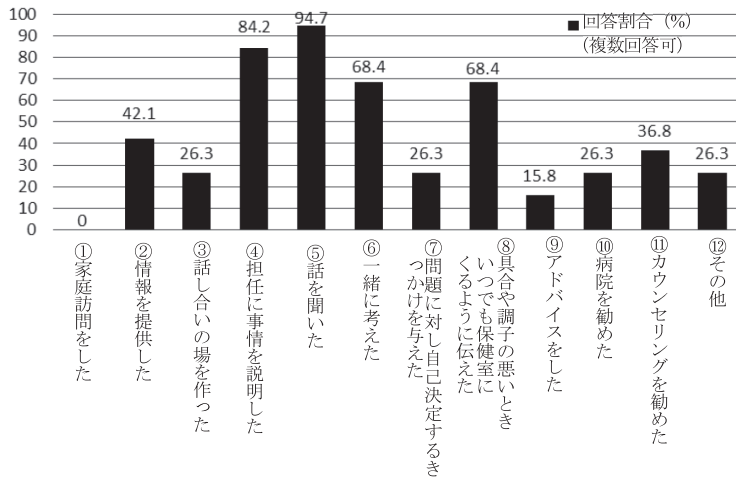


図2. 健康相談に対して養護教諭が行った対処について (n=19)

現役養護教諭自身が行った対処について、回答の多かった上位3項目は、「話を聞いた」18名 (94.7%)、「担任に事情を説明した」16名 (84.2%)、「一緒に考えた」「具合や調子が悪いときいつでも保健室へくるように伝えた」13名 (68.4%) であった (図2)。

4-4. 対処後の結果

A) 女子大学生

表10. 対処後の結果について (女子大学生)

質問番号	対処の結果(複数回答可)	回答数	回答割合 (%)
①	すっきりした	51	81.0
⑤	解決できた	14	22.2
②	変わらない	4	6.3
⑧	その他	3	4.8
⑥	解決できない	1	1.6
③	かえってわからなくなった	0	0
④	ムカついた	0	0
⑦	かえって悪化した	0	0

養護教諭が行った対処後、本人に得られた結果について、最も多かった回答は、「すっきりした」51名 (81.0%)、次いで「解決できた」が14名 (22.2%) であった。また、「その他」の内容として「考える幅が増えた」「参考になった」等があげられた (表10)。

## B) 現役養護教諭

表11. 対処後の結果について（現役養護教諭）

		(n=19)	
質問 番号	対処の結果(複数回答可)	回答数	回答割合(%)
⑧	その他	9	47.4
①	スッキリしていた	6	31.6
⑤	解決できた	5	26.3
②	変わらない	2	10.5
③	かえってわからなくなっていた	0	0
④	ムカついた	0	0
⑥	解決できなかった	0	0
⑦	かえって悪化した	0	0

現役養護教諭自身が行った対処後の児童生徒の様子について、最も多かった回答は、「その他」9名(47.4%)であった。「その他」の内容として、「話をすることで解決はしないけど、気持ちが少し軽くなったようだ」「少しずつ快方へ向かった」「何度も話をすることでゆっくりと解決していった」等があげられた。次いで、「スッキリしていた」が6名(31.6%)、「解決できた」5名(26.3%)の順であった(表11)。

## IV. 考察

## 1. 保健室の印象について

女子大学生への設問において、保健室をひとことで例え自由記述にて回答を求めた内容に、「けがや病気をした時に行く所」や「学校の病院」等の「救急処置」というイメージや、「癒しの場所」「安らぎの場所」等の「リラックス」というイメージがあげられた。保健室という空間に、「救急処置」の身体をケアする面と、「癒し」や「安らぎ」等の目に見えない温かいリラックスできる雰囲気、つまり、心をケアする面の両面があると考えられる。また、上原<sup>5)</sup>は、「養護教諭自身の個性が、保健室経営に影響し、(活用しやすい保健室がよい)や(いやしの場になっている)」ということである。」と報告しており、本研究の保健室の印象についても、養護教諭の個性が反映されたと考えられる。

校種別に着目すると、小学校や中学校では「身長や体重を測る所」の項目が2番目に高く、高校では「悩みを相談する所」の項目が2番目に高い結果となった。このことは、心身の成長発達で起こるニーズの変化であると捉えることができる。児童生徒期の保健室観は、発達段階や環境によって変化していき、保健室への印象も変化することが考えられる。保健室は、児童生徒のニーズや心身の成長発達と共に常に変化し続け、臨機応変に対応する場となることが重要である。

課程別に着目した項目について、養護は、幼稚園に比べて、「養護教諭に会いに行く所」の項目がどの校種においても有意に多かった。これは、養護が児童生徒期から、保健室や養護教諭を身近に感じていたからであると考えられる。保健室や養護教諭を感じる親

近感よって、好意的な印象を持ち、養護教諭志望へ繋がったのではないかと推測する。

保健室の印象を問う設問に対し、小学校から高校までの校種に関係なく、多くの女子大学生が保健室は救急処置の場であると捉えており、この結果は先行研究<sup>3)</sup>と同様であった。

現役養護教諭に対して行った設問である、1年間を通して特に重視して活動している職務について、多くの現役養護教諭が「救急処置及び救急体制に関すること」と回答しており、女子大学生の保健室に対する印象と現役養護教諭の職務に対する意識は合致することがわかる。つまり、経営する側の意図は利用する側へ伝わっているということが考えられる。また、「救急処置活動は児童生徒が生涯にわたって健康な生活を送るために必要な知識・技術を学ぶ機会にもなる」<sup>2)</sup>とされており、現役養護教諭らの救急処置という職務に対する意識は、児童生徒の命を救うことだけでなく、事故や怪我の未然防止や、ヘルスプロモーションの考え方など、教育的な面も持ち合わせていることがうかがえる。

保健室の印象が、単に「救急処置の場」や「リラックス」で留まることなく、児童生徒一人ひとりのニーズに応えながら、保健室が教育の場として更に機能することが期待される。

## 2. 養護教諭に求める資質・能力について

女子大学生に対する設問において、養護教諭に求めるものは、「話しやすさ」「やさしさ」が9割を超えており、女子大学生は、養護教諭に、温かみのある人間性を求めているということがわかった。反対に、現役養護教諭の回答では、「迅速な対応ができる」が最も多く、専門性を活かした能力面を重視していることがわかる。

女子大学生も現役養護教諭も「やさしさ」や「包容力がある」等の温かさや安心感といった人間性の回答が上位であると仮説を立てたが、結果は異なった。現場で活躍する養護教諭は、学校の中で児童生徒の健康や命に一番近い存在であり、迅速な対応によって、児童生徒の健康や命を守ることができる。その対応が児童生徒から得られる信頼となり、児童生徒への「やさしさ」や「包容力」といった温かさや安心感を与える要素に繋がっていくのではないかと推測できる。多くの現役養護教諭が回答した「迅速な対応ができる」とは、専門性を活かした能力面のみでなく、迅速な対応から得られる信頼感であり、養護教諭としての役割をしっかりと果たすための回答であると考えられることができる。

安林ら<sup>6)</sup>は「子どもの心のケアという役割を有する教員として、養護教諭には「人間性」が特に強く求められている。」と報告しているが、今後はそれらに加え、専門性を活かした能力面から得られる信頼感を獲得するために、養護教諭自身の更なる力量形成や学び続ける姿勢を持つことが重要である。

## 3. 養護教諭への健康相談について

### (1) 健康相談経験

女子大学生全体で、相談経験のある者は4割強であった。4割強という数字から、今回調査した女子大学生の約2人に1人が当てはまり、先行研究<sup>3)</sup>と同様の結果が得られ、養護教

論が行う健康相談の機会が多いことから健康相談の重要性がうかがえる。課程別に見ると、養護は7割、幼稚園は2割であった。養護の養護教諭への相談のしやすさが高かったことがわかり、養護教諭への信頼感が強かったことや、その経験が一つのきっかけとなり、養護教諭志望の動機に繋がったことが示唆された。

現役養護教諭が、「よく」健康相談にくると回答した割合は、2割であった。この結果は、「よく」という基準を一定にするための定義付けが大きく反映された結果となった。

女子大学生の結果に関しては、先行研究<sup>3)</sup>でも言われているように、相談したという意識に基づく結果であり、相談したという意識のない対象者もいるであろう。また、養護教諭に対しての設問では、1日の保健室利用者数の平均<sup>1)</sup>を基準としたため、保健室以外の学校内での養護教諭への接触は含まれていない。つまり、実際の現場では、今回得られた結果よりも健康相談の機会が多いと推測できる。

相談経験がある女子大学生の相談内容について、最も多く回答した項目は、「友人関係」「進路」であった。現役養護教諭も「友人関係」を最も多く回答しており、双方の回答が一致した。この結果より、養護教諭への相談内容は、学校生活で起こる問題が多いことがわかる。保健室を利用する側である児童生徒は、学校生活を有意義に過ごすことを望んでいるだろう。養護教諭が健康相談を行うことで、「健康相談によって子どもがその子らしく安定した心で学校生活を送ることで気づく力が高まり、学習活動が効果的に行なわれることを目指している」<sup>7)</sup>とある。保健室を経営する側の養護教諭も、学校生活の中で起こる問題の解決やそれによって感じるストレスを軽減し、児童生徒が有意義に学校生活を過ごすことや学習活動が効果的に行われることを強く望んでいると推測できる。

健康相談の機会や相談の内容が学校生活での問題が多いことから、健康相談は学校全体や地域とも連携して取り組むべき活動であると言える。西尾<sup>8)</sup>の研究でも「子どもの健康にかかわる様々な問題は、養護教諭だけが扱う課題ではなく学校全体で取り組む課題であることは、教育の現場においても異論はない。保健室を中心に、学校全体そして地域社会も視野に入れた健康づくりのネットワークを形成し協働をすすめることがこれからの養護教諭に求められる役割ともいえる。」と報告されている。教職員や地域の理解・協力を得て健康相談が円滑に行われるよう、養護教諭はコーディネーターとして、教職員や地域社会との架け橋となることが重要である。それに加え、健康相談が独立した活動ではなく、学校教育の一環として展開され、様々な教育活動と関連しながら活用されていくと、健康相談の効果は更に発揮されるのではないかと考えられる。

## (2) 養護教諭への相談で特に記憶に残っているもの

養護教諭に相談経験のある女子大学生の特に記憶に残っている相談は、「人との関わりの中での問題である、友人関係が最も多い」と仮説した。しかし、実際最も多かった回答は、「進路」であった。対象者が受験を終えたばかりの新入生だったこともあり、結果に反映され

たと言える。また、「進路」の相談を通して、養護教諭がさりげなく行ってきた対処が、相談をした女子大学生の可能性や、なりたい自分について考えようとする態度に影響し、女子大学生の心に深く印象に残ったのではないかと推測する。これは、「キャリア教育」の「自己理解・自己管理能力」に当たるのではないだろうか。「自己理解・自己管理能力」は、「自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力」<sup>9)</sup>とされている。「進路」の相談を養護教諭に行ったことで、児童生徒期の女子大学生は、自分の考えや感情を整理し、今後の見通しを持てるような教育的効果を受けた可能性があると考えられる。養護教諭から無意識のうちに受けた教育的効果が、特に記憶に残った相談内容の理由として考えられる。

また、「進路」の項目を課程別に着目すると、幼稚園より、養護の方が多いたことがわかった。養護教諭志望学生はこれまでの学校生活の中で、保健室や養護教諭との関わりから、養護教諭への憧れや自身が考える理想の姿を形成していると考えられる。養護教諭へ相談することで、なりたい自分を明確化し、自己実現の機会を得ていると推測する。「養護そのものが人と人のかかわりを大事にしていることから、そのこと自体がモデルとして学習教材になっている。」<sup>2)</sup>とあるように、養護教諭自身が、児童生徒の身近な大人のモデルになることは十分にあると言える。養護教諭は、児童生徒の身近な大人のモデルとして健康相談を行うことが重要である。それによって、健康相談はより効果的なものとなり、一人ひとりに応じた支援に繋がると考えられる。

現役養護教諭の回答では、「友人関係」が最も多い結果となった。「友人関係」の問題の背景や延長線上には、いじめや不登校等の心の健康問題が隠れている恐れがある。養護教諭は、健康相談を通して、心の健康問題の早期発見・対応する能力が求められる。

### (3) 相談に対して養護教諭が行った対処

女子大学生の最も多かった回答は「話を聞いてくれた」であった。現役養護教諭も自身が行った対処について「話を聞いた」が最も多かった。「子どもの思いを聴くというのは、言葉を聞くのではなく、その裏に隠されている思いを感じ取ることである。」<sup>10)</sup>とあり、児童生徒の個性や感情、気持ちを受け止め、問題を把握するためには「話を聞くこと」が極めて重要である。つまり、「話を聞くこと」の役割は多種多様であることが示唆された。また、安林<sup>8)</sup>によると「養護教諭がひとりの子どもにとって、身近な大人として、子どもと対等に対話する役割を担っていると言える。」と示されており、現役養護教諭は、教員としての自覚や責任をしっかりと持ちつつ、児童生徒が話しやすい雰囲気作りを行い、養護教諭自身の個性や手立てを活用し、健康相談を進めていく必要があると考えられる。



#### (4) 対処後の結果

対処後の結果、女子大学生の8割が「すっきりした」と回答している。前述したように、養護教諭が「話を聞いてくれた」ことで気持ちを安定させることができたと考えられる。一方、現役養護教諭の約半数も「すっきりしていた」と回答しており、双方の回答は一致した。このことより、平成9年に発表された保健体育審議会で新たに加えられた「健康相談」は上手く機能していることが言える。また、現役養護教諭の多くが「その他」を回答しており、相談の内容によって回答は様々であった。相談前と相談後の児童生徒の表情や行動から、そう読み取っていると推測する。

今後も健康相談がより良く活用され円滑に行われるために、養護教諭はカウンセリング能力や、問題解決のための指導力等を自己研鑽する必要があると考えられる。

## V. 総括及び結論

今回の調査で、女子大学生と現役養護教諭における保健室観・養護教諭観の具体的な考えや違いを知り、保健室や養護教諭が与えている教育的効果や養護教諭の専門性、教育活動としての健康相談の対応・支援の在り方を考察した。

### 1. 保健室の印象について

女子大学生の保健室の印象は、救急処置の場という印象が強く、現役養護教諭も救急処置についての職務を特に重視しており、経営する側の意識は、利用する側へ伝わっていることがわかった。また、校種で保健室の印象や養護教諭の職務に対する意識は異なっており、児童生徒の成長過程におけるニーズが影響することがわかった。今後は、保健室の印象が、単に「救急処置の場」や「リラックス」で留まることなく、児童生徒一人ひとりのニーズに応えながら、保健室が教育の場として更に機能することが期待される。

### 2. 養護教諭に求める資質・能力について

女子大学生は、温かみのある人間性を求めているが、現役養護教諭は「迅速な対応」といった専門的な能力面を求められていると考えていることがわかった。これまでの役割や人間性に加え、専門性を活かした能力面から得られる信頼感を獲得するために、養護教諭自身の更なる力量形成や学び続ける姿勢を持つことが重要であると考えられる。

### 3. 養護教諭への健康相談について

女子大学生の約2人に1人が養護教諭に相談しており、相談内容は学校で起こる問題が多く、特に印象に残っている相談内容は「進路」であった。養護教諭の対処は、女子大学生・現役養護教諭共に「話を聞くこと」で一致した。対処後の結果については、女子大学生は「すっきりした」と回答し、現役養護教諭も「すっきりしていた」と回答した。

健康相談は、学校全体で取り組むべき活動であり、教職員や地域の理解・協力を得て健康相談が円滑に行われることが望まれる。養護教諭は、架け橋となるコーディネーターとして

の役割が更に求められており、健康相談が独立した活動ではなく、学校教育の一環として展開されると、健康相談の効果は更に発揮されるのではないかと考えられる。また、養護教諭は、児童生徒の身近な大人のモデルとして、自身の個性や独自の手立てを活用しながら健康相談を進めていく必要があると考えられる。

今回の調査は、限られた地域の女子大学生と現役養護教諭を対象としており、得られた結果には限界がある。今後は、質問紙の内容を精選し調査対象を広げ、保健室観・養護教諭観について調査し、養護教諭の専門性や教育活動としての健康相談の対応・支援の在り方について深めていきたい。

## VI. 謝辞

本研究を進めるに当たり、ご多忙中にも関わらず調査にご協力いただいた、F県M地区の養護教諭の皆様、K女子短期大学の学生の皆様に深謝する。

## VII. 参考・引用文献

- 1) 公益財団法人日本学校保健会、平成23年度調査結果 保健室利用状況に関する調査報告書。  
Available  
[at:http://www.gakkohoken.jp/book/ebook/ebook\\_H240070/index.html#20](http://www.gakkohoken.jp/book/ebook/ebook_H240070/index.html#20)  
Accessed March 10, 2015
- 2) 石川県養護研究会：新版・養護教諭執務のてびき（第9版），68，東山書房，，2014
- 3) 今野洋子：養護教諭および保健室に関する研究（1）－大学生の持つ養護教諭と保健室の印象から－．北海道浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要『生涯学習研究と支援』（8）：251-266，2005
- 4) 久野真澄，遠山彩香，小林央美，田中勝則：保健室の利用状況と保健室観・養護教諭観の関連．弘前大学教育学部紀要 107：95-100，2012
- 5) 上原美子，中下富子：中学校における保健室来室生徒が望む養護教諭の対応．埼玉大学教育学部付属教育実践総合センター紀要（9）：71-79，2010
- 6) 安林奈緒美：保健と教育が交錯する場における養護教諭の役割－学校管理職へのインタビュー調査を手掛かりにして－．保健医療社会学論集 23（1）：74-84，2012
- 7) 大谷尚子，森田光子：養護教諭が行う健康相談（第12版），26，東山書房，京都府，2014
- 8) 西尾ひとみ：一特集 これからの養護教諭の資質と役割－養護教諭が今，求められる能力とこれから．日本養護教諭教育学会誌 11（1）：6-9,2008

- 9) 文部科学省：今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（中央審議会答申）

Available at:[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf)

Accessed September 10, 2015

- 10) 高石昌弘・鈴木美智子：子どもをとりまく問題と教育 第17巻 保健室における養護教諭の対応, 57, 開隆堂

## **Study on the Views of health room and Yo-go teachers by Women junior College Students and Active Yo-go teachers**

Fumika HASHIGUCHI<sup>\*1</sup>, Mitsue SAKATA<sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup>Department of Childhood Care and Education Kyushu Women's Junior College  
1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

<sup>\*2</sup>Fukuma City Fukuma Middle School  
2-10-1, Hanamigaoka, Fukutsu City, Fukuoka-ken, 811-3214, Japan

### **Abstract**

This study was conducted to consider the differences in the actual conditions and views of Views of health room and Yo-go teachers between their users and operators, as well as the degree of professionalism of Yo-go teachers and the concept of health counseling and support as part of educational activities.

The survey revealed that, while women junior college students carry impressions of health room as “places of first-aid” and “relaxation” and listed a humanistic approach such as “affableness” and “kindness” as qualities required of Yo-go teachers, many of the active Yo-go teachers answered that they particularly attach importance to “matters related to first-aid measures and the first-aid system” among their duties throughout each year, and consider that the quality required of them is “prompt response” - an ability to utilize their expertise.

This study suggests that nurse's offices and activities of Yo-go teachers have educational effects. Health room are expected to function as places of education while meeting the needs of schoolchildren. Further, it is important for Yo-go teachers to strive to improve the required qualities and capabilities by fostering student competence and continued learning.

**Keywords** : Yo-go teacher, Health room, health counseling